

シテ 六條御息所

髪をつけ、髪帯をしめ、肥眼の面をかける。襟帯を着付けに着、髪帯を腰巻にして、腰帯をしめ、上に唐織を垂折に着る。持物は扇、物着にて面を般若に替へ唐織を脱ぐ。持物は打杖。

ツレ 照日の神子

髪をつけ、髪帯をしめ、小面の面をかける。唐織を着付けに着、その上に水衣を着る。持物は数珠。兜巾をいただき、厚板を着付けに着、白大口をはき、上に水衣を着て、髪帯をしめ、腰帯をしめ、小刀をさす。持物は数珠、扇。

ワキ 横川の小聖

洞窟帽子をいただき厚板を着付けに着、白大口をはき、上に拾持衣を着て、腰帯をしめる。持物は扇。

ワキツレ 大臣

ツレが出、座についた後に後見が小袖(病床の葵上を表わす)を正先にひろげて置く。ワキツレ舞台に出る。

ワキツレ「是は朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女。葵上の御物の氣。以つての外に御座候程に。貴僧高僧を請じ申され。大法秘法医療様々の御事にて候へども。更に其験なし。こゝに照日の神子とて隠れなき様の上手の候を召して。生霊死霊の間を。様にかげさせ申さばやと存じ候。やがて様に御かけ候へ

ツレ「天清淨地清淨。内外清淨六根清淨。より人は。今ぞ寄りくる長濱の。あし毛の駒に。手綱ゆりかけ

シテ「三つの車に法の道。火宅のうちをや。出でぬらん夕顔の。宿のやれ車。やる方なきこそ。悲しけれ

「シテは舞台に出る。」

「うき世は牛の小車の。うき世は牛の。小車の廻るや報いなるらん

凡輪廻は車の輪の如く。六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習い。きのふの花は今

日の夢と驚かぬこそ愚かなれ身の憂きに。人の恨みの猶そひて。忘れもやらぬ我が思ひ。せめてや

しばし慰むと様の弓に怨霊の。これまで現れ出でたるなり

「あら愧かしや今とても忍び車の我が姿

朱雀院→源氏物語の中で仮作された帝の名、光源氏の兄

葵上→同じく作中の人物で、光源氏の北方

大法→真言密教の修行中、最も重んぜられるもの

秘法→真言宗で秘密の折持

様に掛ける→梓弓の弦を鳴らし、呪文をとなくて生霊・死霊を呼び寄せる巫女。呼び寄せられた霊は巫女の口を通して物を言う。口寄せという

天地→清浄マデー口寄せの初めに唱える清めの呪文

「月をば眺めあかすとも。月をば眺めあかすとも月には見えじかげろうの。様の弓のうら若に立ち寄り憂きを語らん。立ち寄り憂きを語らん

シテ「様の弓の音は何くぞや。様の弓の。音はいづくぞツレ「東屋の母屋の妻戸に。いたれども

シテ「姿なれば。とふ人もなし

ツレ「不思議やな誰とも見えぬ上臈の。破れ車に召されたるに。青女房と思しき人の。牛もなき車の轅に

取りつき。さめざめと泣き給ふ痛わしきよ

「若しかやうの人にててもや候らん

ワキツレ「大方は推量申して候。唯つつまず名を御名のり候へ後シテ「それ娑婆の電光のさかひには恨むべき人もなく

悲しむべき身もあらざるにいつさてうかれそめつらん

「只今様の弓の音に。ひかれて現れ出でたるをば。いかなる者とかおぼし召す。これは六條の御息所の怨霊なり。我世に在りし古へは。雲上の花の宴

春の朝の御遊に馴れ仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み花やかなりし身なれども。衰へぬれば朝顔の。日陰まつ間の。有様なり。ただいつ

となき我が心。物うき野辺の早蕨の。萌え出でせめし思ひの露。かかる恨みをはらさんとて。これまで現れ出でたる

地 「なり思ひ知らずや世の中の情は人のためならず我人の為つらければ。われ人のためつらければかならず身にも報うなり。何を嘆くぞ葛の葉のうら

みはさらに盡きすまじ恨みはさらに盡きすまじ

シテ「あら。恨めしや

「今は打たではかなひ候まじ

ツレ「あら浅ましや六条の。御息所程の御身にて。うわなり打ちの御ふるまひ。いかでさる事の候べき。唯思し召し止り給へ

「若しかやうの人にててもや候らん

ワキツレ「大方は推量申して候。唯つつまず名を御名のり候へ後シテ「それ娑婆の電光のさかひには恨むべき人もなく

悲しむべき身もあらざるにいつさてうかれそめつらん

「只今様の弓の音に。ひかれて現れ出でたるをば。いかなる者とかおぼし召す。これは六條の御息所の怨霊なり。我世に在りし古へは。雲上の花の宴

春の朝の御遊に馴れ仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み花やかなりし身なれども。衰へぬれば朝顔の。日陰まつ間の。有様なり。ただいつ

となき我が心。物うき野辺の早蕨の。萌え出でせめし思ひの露。かかる恨みをはらさんとて。これまで現れ出でたる

うら若→弓の上臈の弦をかけることに霊魂が着るといふ

妻戸→両開きの戸

上臈→位の高い婦人、貴婦人

青女房→年若く官位の低い女房は貴族の家に仕える女

轅→牛車などの前につけた二本柄。この先にくびきを取付けに引かせる

娑婆の電光→娑婆(人生)が短うかく短いたとえ

うかれ→弦の音に誘われて出たといふ

雲上→官中

仙洞→御所

衰へぬれば朝顔の→日に当たると衰へぬ朝顔のように、衰れぬ境遇

葛の葉→風で裏返りやすいので「恨み」の枕詞とする

うわなり打ち→前妻が後妻を打ち叩くこと

「いやいかにいふとも。今は打たではかなふまじと。枕に立ち寄りちようと打てば」

〔シテは小袖へ寄つて打つ〕  
「此上はとて立ち寄りて。わらははあとにて苦を見る  
する」

「今の恨みはありし報い  
しんば  
「瞋恚のほむらは  
「身をこがす  
「思ひ知らずや  
「思ひ知れ

「うらめしの心やあら恨めしの心や。人の恨みの深くして。うき寝に泣かせ給ふとも。生きて此世にましますば。水暗き澤辺の螢の影よりも光る君とぞ契らん

「わらはは蓬生の  
「もとあらざりし身となりて。葉末の露と消えもせば。それさへことに恨めしや。夢にだにかへらぬものをわが契り。昔語りになりぬれば。猶も思ひは増すかがみ。其面影も恥かしや。枕に立てる破れ車打ち乗せ隠れ行かうよ。打ち乗せ隠れ行こうよ

〔シテは後見座にて物着（中入りしないで演者の装束・面などを替える事）ワキツレ問狂言を呼び出し問答。〕  
「いかに誰かある。葵上の御物の氣。以ての外に御座候程に。横川の小型を請じて来り候

「九識の窓の前。十乗の床のほとりに。瑜伽の法水をたたへ  
「三蜜の月を澄ます所に。案内申さんとはいかなる者ぞ  
「此間は別行の子細あつて。何方へも罷り出でず候へども。大臣よりの御使と候程に。やがて参ろうずるにて候

「夜陰と申し御参めでたう候  
「さて病者は何くに御座候ぞ  
「あれなる大床に御座候

ちようとちようと。物を討つ音

あとにて苦を見する。照日の神子が、御息所を祈り伏せること

瞋恚のほむらは。自分の心に反するものを激しく恨むこと

うき寝。心落着かず安眠できない様子

もとあらざりし身。何の關係もない他人の身。御息所のこと

面影。枕許の鏡に映つた御息所の醜い姿のこと

横川。比較山三塔の一

九識。一切のものを識別するところ  
十乗。涅槃（ねはん）に入る十種の法

三蜜。印を結ぶ、真言を唱える、仏を念ずる。の三つの修行のこと

ワキ「これは以つての外の邪氣と見えて候。やがて加持申さうずるにて候

ワキツレ「急ぎ加持あつて賜わり候へ  
ワキ「心得申し候

〔ワキは加持祈禱を始める。後シテは唐織をかすいて常座へ〕  
〔ワキの祈りに対して、シテとの戦いが始まる〕

ワキ「行者は加持に参らんと。役の行者の跡をつぎ。

胎金兩部の峯をわけ。七寶の露を拂いし篠懸に  
「不浄を隔つる忍辱の袈裟。赤木の数珠のいらたかを。さらりさらりと押しもんで

「一祈りこそ祈つたれ。東方に降三世明王。曩謨三曼陀縛日羅赦  
シテ「いかに行者。はや帰り、給へ。かへらで不覚し給ふなよ

ワキ「たとひいかなる悪霊なりとも。行者の法力盡くべきかと。重ねて数珠を押し、もんで

「重ねて数珠を押し、もんで

地「東方に降三世明王。東方に降三世明王

シテ「南方軍荼梨夜叉  
地「西方大威徳明王

シテ「北方金剛  
地「夜叉明王

シテ「中央大聖  
地「不動明王

「不動明王。曩謨三曼荼縛日羅赦。旋陀摩訶尊遮那  
そなたやんたらたかまんちんちんおがせつしやくたいちえん  
娑婆多耶咩多羅吃干曼聽我説者得大智恵。知我心  
者即身成仏

シテ「あらあら恐ろしの般若声や  
「これまでぞ怨霊此のち又も来るまじ。誦誦の声を聞く時は。誦誦の声を聞く時は。悪鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もここに來迎す。成仏得脱の。身となり行くぞ有難き身となり行くぞ有難き

〔シテは留拍子を踏む〕

加持。真言密教で、印を結び結を用い、陀羅尼を唱えて病氣災難を除くこと

役の行者。大和葛城山で修行した山伏の始祖

胎金兩部の峯。大和の大峰山  
忍辱の袈裟。忍辱は種々の侮辱をも忍耐して動じない心。それが一切の外障を防ぐので、上に着る袈裟にたとえたもの

赤木。紫檀などの赤い木  
いらたか。角のある数珠玉

東方に。以下は東西南北と中央に鎮座する明王で、山伏道で最も尊敬する五大尊、共に悪魔を降伏する明王である

曩謨三曼。は不動明王に祈る呪文  
旋陀摩訶尊。は不動明王の鬘鬘の一部で、山伏の祈祷によく用いられる

成仏得脱。怨念を断ち、悟りを開いて、激しい嫉妬・憎悪の迷いの世界を離脱した身